

〈書評〉

## 翻訳における政治性・不可能性・双方向性 松本和也編『翻訳としての文学——流通・ 受容・領有』（水声社、2024年）を読む

小澤 裕之

本書は、神奈川大学の松本和也氏が主催する共同研究グループ「各国近代文学の研究」に所属する、日本文学、アメリカ文学、フランス文学、中国文学など専門分野の異なる6人の文学研究者が、広義の「翻訳」に関する論考をそれぞれ寄せた論文集である。

以下、各論考について述べてゆくつもりだが、その前にまず断っておきたい。筆者の専門は翻訳論ではないし、本書で扱われている国の文学でもない。ロシア文学である。ではなぜ書評を担当することになったかといえば、松本氏にお声がけいただいたからである。ではなぜお声がけいただいたかといえば、近年たまたまロシア文学の邦訳について発表したり論文を書いたりする機会が重なり、そのたびに松本氏にご助言を仰いできたからであろう。また筆者自身、いくつかの邦訳の実践者であることも関係しているかもしれない。門外漢ではあるが、少しでも有益な視点を提供できれば幸いである。

ロシア出身の言語学者ロマン・ヤコブソンは、「翻訳の言語学的側面について」（桑野隆訳、原著1959年）という論考において、「いかなる言語機能の意味も、別の、代わりの記号への翻訳である」と述べたうえで、「言語機能を解釈する三種類の方法」を次のように名づけている。すなわち、「言語内翻訳」「言語間翻訳」「記号間翻訳」の三つである。「言語内翻

訳」は言葉の言い換えを指し、たとえば「独身者」を「未婚者」に転換するケースが該当する。「言語間翻訳」は通常の意味での翻訳を指し、たとえばロシア語を日本語に転換するケースが該当する。最後の「記号間翻訳」は、言語記号を非言語的記号体系の記号に転換することであり、ヤコブソンは具体例を示していないが、たとえば小説を映画に翻案（アダプテーション）するケースが該当すると考えられる。

ヤコブソンのように、言葉の言い換えまで広義の「翻訳」に含めるのであれば、文学的文章のみならず日常会話に用いられる文章までも「翻訳」ぬきには成立しえないことになり、したがって私たちはみな「翻訳者」ということになる。学生も、スポーツ選手も、家賃滞納者も、デイトレーダーも。

そう考えると、『翻訳としての文学』という書名は、まことに当を得ていると言うことができる。「いかなる言語機能の意味も、別の、代わりの記号への翻訳であるならば、いかなる文学もまた「翻訳」として存在するほかないからである。とはいって、本書に収録されている論考の多くは、ヤコブソンの用語にしたがえば「言語間翻訳」の問題を、要するに通常の意味での「翻訳」の問題をテーマに据えている。

岡部杏子「十九世紀フランス詩の日本における受容——マルスリーヌ・デボルド＝ヴァルモールの場合」は、「十九世紀ロマン主義時代の詩人マルスリーヌ・デボルド＝ヴァルモールの詩が、日本において誰によって、どのように翻訳され、受容されてきたのかを明らかに」し、吉田遼人「一九一七年、近代日本文学の翻訳事件——その輪郭と時代性」は、100年以上前の日本において、近代日本の作家27名による28篇の小説の英訳計画が立案され、そして頓挫した「翻訳事件」の内実に肉薄する。

中村みどり「同時代小説としての中国文学と創作における日本語——『改造』『現代支那号』（一九二六年七月）について」は、総合雑誌『改造』

に掲載された中国人作家による日本語小説を取りあげ、山本亮介「佐々木高政英訳「吉備津の釜」（『雨月物語』）と掲載誌『英語研究』——戦時下日本文学翻訳の一面」は、第二次世界大戦下の日本において、「吉備津の釜」が「敵性語」である英語に翻訳された背景に着目する。

一方で、古屋耕平「ラルフ・ウォルド・エマソンとドイツ翻訳理論——ゲーテの影響を中心に」と、松本和也「フィリピン徴用時代の三木清による文化工作言説」は、ヤコブソンの挙げた「三種類の方法」に収まらない、非言語的レベルの「翻訳」にも関心を向ける。前者は、19世紀アメリカを代表する知識人エマソンが、他言語を翻訳することで他文化を自国とのものとして「飼い慣ら」そうとし、やがてプラトン的なイデア／真理に接近する行為として翻訳をとらえるようになり（いわば精神の物質への翻訳）、普遍性の獲得を目指した過程を跡づける。後者は、第二次世界大戦中にフィリピンへ徴用された三木清が、日本によるフィリピン占領を正当化する、「きわめて思想的-理論的な「クリシェ」」に則って文化工作言説を構築した様子を追う。

このふたつの論考はどちらも、翻訳という営為の政治性を暴いている。早川敦子『翻訳論とは何か』によれば、20世紀後半以降、欧米における翻訳論は「テクスト分析よりも文化的衝突や葛藤へとパラダイムを大きく傾斜させてきた」という。とりわけポストコロニアル批評と協同する翻訳論は、植民地化の道具として翻訳が役立った事実に注目する。征服者は自国の文化を征服された国の言語に翻訳することによって、植民地を「啓蒙」し支配することができたのである。松本和也氏の論文は、まさしくこの「啓蒙」と「支配」の内実を、戦時下の日本とフィリピンの関係に即して詳らかにする。ただしそれは、「フィリピン（人・文化）を「日本の精神」にあわせて半ば強引に翻訳することで、フィリピン（人・文化）を大東亜共栄圏に包摂しようとした」（傍点は原著）三木清の企図を明らかに

することで達成されている。つまり、征服された側から征服した側への翻訳を問題にしているのである。これは必ずしも言語的レベルの翻訳には收まらない広義の「翻訳」とはいえ、ここでは翻訳という営為そのものに備わる政治性が丸裸にされている。

古屋耕平氏の論文は、植民地の問題を直接扱っているわけではないが、「あらゆる言語のあらゆるテクストは翻訳可能である」という「ロマン主義的でありかつ觀念的である」エマソンの考え方が、「自国の言語や文化こそが普遍的であるという自言語・自文化中心主義を強化することに繋が」ったことを指摘し、やはり翻訳の政治性に着目する。他文化を「飼い慣らす」ことができるほどの「英語の包容力に対する」エマソンの信頼は、「文化的植民地主義や言語的帝国主義といったものに対する彼の暗黙の贊意」と同根である。松本氏の論文が、「文化の翻訳」の強制的な行使に着目しているのに対し、古屋氏の論文は自発的な行使に着目している。その意味で両者は対蹠的といえるが、これは「文化の翻訳」そのものの二面性にはかならない。たとえば日本が、第二次世界大戦中は他文化を強制的に「包摶しようとした」一方で、明治時代は他文化を積極的に「飼い慣ら」そうとしたことを思い出してもらえばよい。

ところで古屋氏の論文は、「裏切り者の翻訳者」(traditori traduttori)という有名なフレーズに言及している。これは、翻訳行為の不可能性を示唆するイタリア語の警句だが、ヤコブソンはこの警句そのものがすでに翻訳の不可能性を体現していると述べる。つまり、これはイタリア語で韻を踏んでいるからこそ警句たりえているのであり、もし英語に訳せば、その音素面での類似を、掛詞の価値をそっくり奪ってしまう、というのである。このフレーズは、「詩はその定義からしても翻訳不可能である」というヤコブソンの主張を端的に実証している。

岡部氏の論文は、まさにその詩の翻訳を扱う。デボルド＝ヴァルモール

の詩「サアディの薔薇」における「私」の性別の曖昧性を中原中也訳に看取し、しばしば「女性性と結びつけ」られてきた彼女の詩への「ステレオタイプな評価」を乗り越える契機をそこに見出す。たとえば、他の多くの訳者が「サアディの薔薇」を「女ことば」で訳しているのに対し、中也はよりニュートラルな表現を用いて訳しているというのである。

概して「女ことば」は、「言語間翻訳」に内在する厄介な問題である。というのも、日本語やロシア語のように「女ことば」を表現しやすい言語と、フランス語や英語のように、性を弁別する文法機能を持たない言語とが存在するからである。もちろん、フランス語にしろ英語にしろ、ある種の単語を頻用するなどして「女ことば」を表現することは十分可能だが、「サアディの薔薇」のように文脈がはっきりしないテクストでは、性の曖昧性がどうしても残る。性差を明確に区別しうる日本語に翻訳する際は、男女どちらかに決定するか曖昧性を保持するか、訳者は決断を迫られることになるのである。

吉田氏の論文も、かつて近代日本の小説が一挙に英訳される可能性があったという「翻訳事件」を扱いつつ、英訳に対する泉鏡花の否定的反応に着目することで、じつは翻訳不可能性の問題を照らしだしているといえる。作家・作品の選定と、選者・訳者の資質が当時の文壇で論われていたなかで、鏡花はひとり、「訳されゝば長所を失ふ」ことを問題とし、「高野聖」の英訳に否定的だったという。この拒絶理由からは、「高野聖」は内容を翻訳／伝達するだけでは片手落ちになる、という鏡花の危惧を読みとることができる。さらにいえば、その内容さえ文体や音素と表裏一体のため翻訳不可能だと考えていたのではないか、と深読みすることもできる。いやこれは、ヤコブソンを引き合いにだしてきた筆者のうがった読みかもしれないが、いずれにしろ、そういう深読みを惹起するような話題がこの「翻訳事件」を取り巻いており、すこぶる興味深い論考といえる。

吉田氏の論文は、「翻訳事件」に「刻み込まれた時代性」に着目し、作家たちの間に引き起こした様々な反応の背景を探っているが、山本氏の論文も同様のアプローチを取る。日本語テクストの英訳を扱う点も両者に共通している。山本氏によれば、「翻訳物であるテキスト」は「文脈依存的な側面が強い」一方で、そこには「諸種の文脈に還元できない性質が浮上する可能性」もあるという。第二次世界大戦下の、英語を「敵性語」とみなす日本において、なぜ「吉備津の釜」が英語に訳され雑誌に掲載されたのか。結局その確たる理由は不透明とはいえ、その不透明さこそが、つまり「言葉の意味作用のすべてを文脈へと還元しきれない」ことこそが、「文学テキストの事実と言えるはずだ」という結論は、英語をめぐる当時の状況を次々と明るみにだした末に行き着いているがゆえに重みがある。

また、戦時中の「敵性語」への翻訳の問題は、先述したポストコロニアル批評と協同する翻訳論の観点から見ても、じつに興味深い事例だといえる。実際、山本氏の論文も、「官民一体となった日本文化宣伝策」の「一環として画策された日本文学翻訳活動の文脈」を参照している。日本の文学研究において翻訳を扱う場合、他言語から日本語への翻訳に注意が行きがちなことを思えば、このように逆方向の翻訳に注目する視点は貴重である。

その意味で、中村氏の論文はひときわ注目に値する。なぜなら双方向的な自己翻訳の問題を扱っているからである。『改造』の夏季増刊特集号「現代支那号」に掲載された、中国人作家4名による日本語小説のなかには、はじめ中国語で書かれ、そして作者「みずからが中国語の原作を日本語に翻訳した」ものがあるという。また逆に、はじめ日本語で書かれ、「みずから中国語に翻訳した」可能性の考えられるものもあるという。同論文は、中国語と日本語それぞれで書かれた／翻訳された小説を比較することが主眼ではないが、もし詳細に比較すれば、それぞれのテクストの特

徵やテクストをめぐる時代状況が浮き彫りになるのみならず、それぞれの言語の特性が照らしだされる可能性も秘めており、今後の研究が期待される。

20世紀後半以降、国と言語を越境して執筆するバイリンガル作家に世界的な注目が集まってきた。ベケットとナボコフはその代表的存在だろう。そしてふたりとも自作をみずから別言語に訳す自己翻訳を行なっており、そのことに関しすぐれた研究書も現れている（たとえば秋草俊一郎『ナボコフ 訳すのは「私」——自己翻訳がひらくテクスト』）。その意味で、日本語と中国語の往還に着目する中村氏の論文はきわめて現代的であり、まさに「翻訳としての文学」を読むための示唆を与えてくれる。

以上、各論考について筆者なりに考えたことを述べてきた。松本氏曰く、「流通・受容・領有」が「各論をゆるやかにつなぐキーワード」だという本書を、結果的に、翻訳における「政治性・不可能性・双方向性」という観点から読み直した書評になったと思う。とはいえ、同氏の言うように、「書かれた言葉を読む」ということそれ自体」がまことに「難しい」ため、本書評は図らずもその難しさを実証してしまっているかもしれない。だが読むことの「難しい」ばかりではない領域を、自由で、多様で、愉快で、そして広大な領域を、本書評が少しでも指し示せていることを願うばかりである。